

K289
H41
#29



條木
書庫

K289
H41
729

10

文政十七年五月二十日發行

鄭氏女孝經圖會

全

浪華書肆

真田松庇閣

真田松庇閣印

ていーぜんまきりきやうぶ

けし書に唐の綱散郎陳述と
り人の妻鄭氏の作を
りりいきといざる女
ふたにやれ小かき
次ぎに志あへの
くをくた集
時のみくご
まあまのり
とわらちこの
書紙摺
子細を表
小書りし
葵開せしれ
志るり

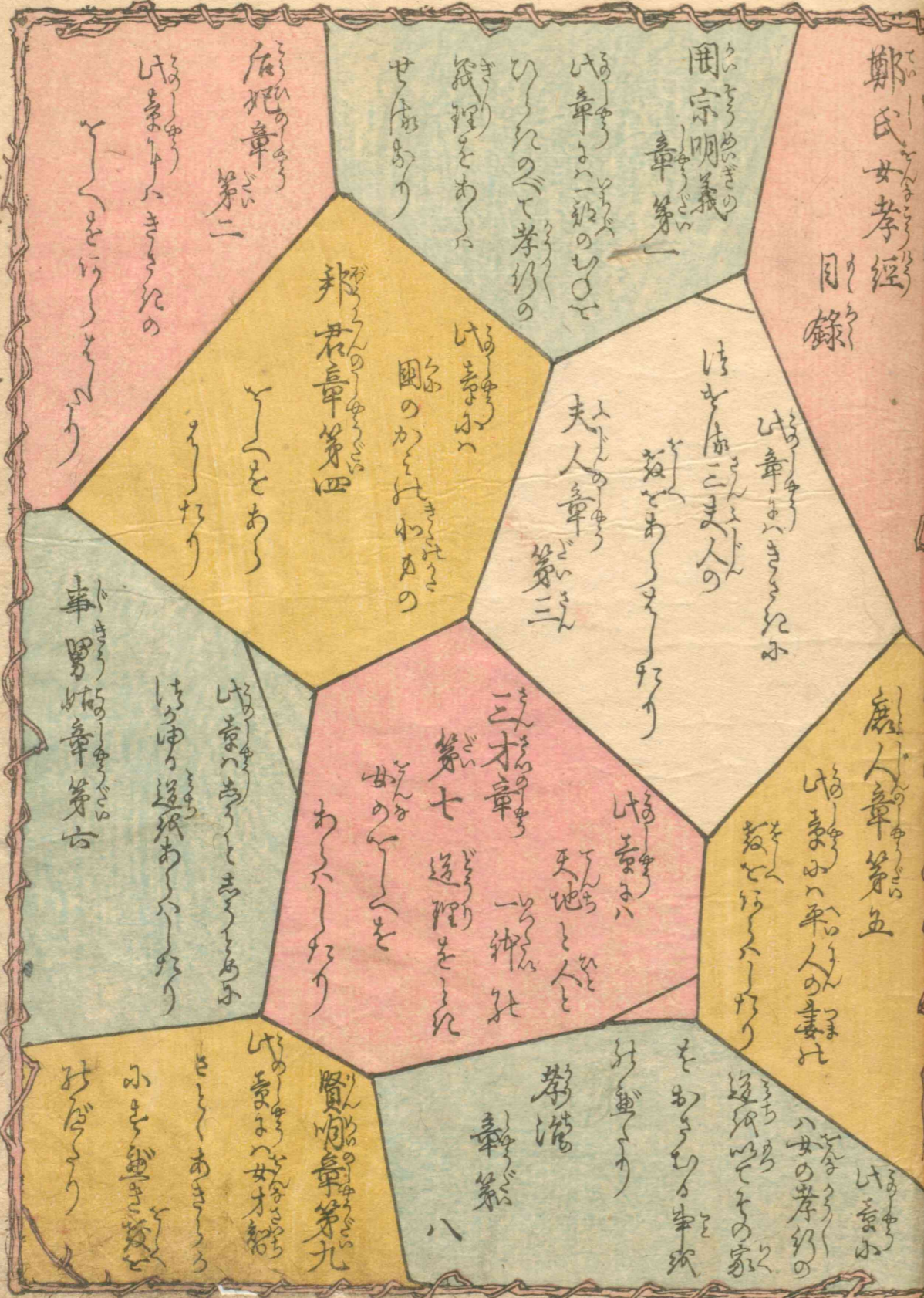


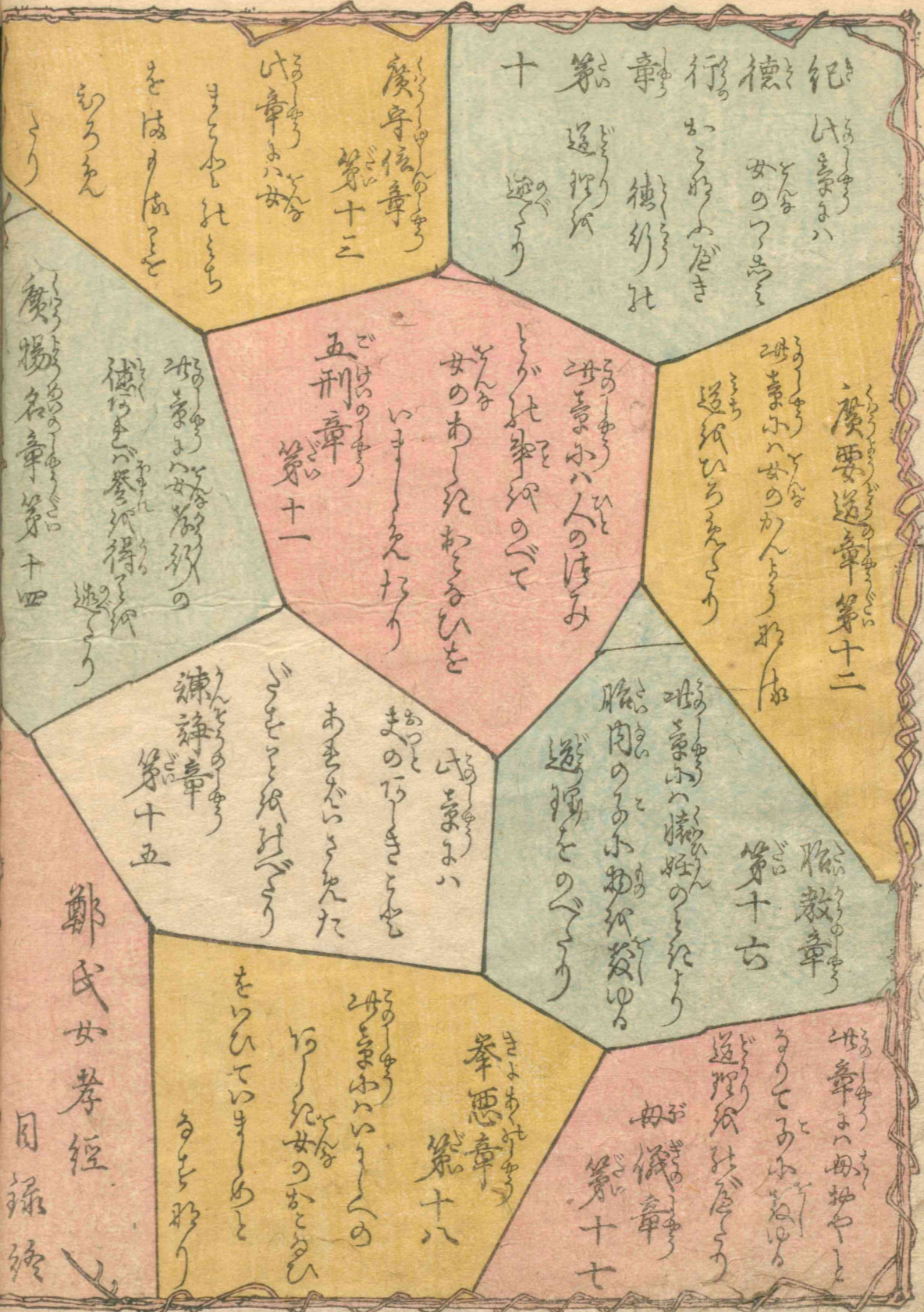
唐進女孝烈表

夫天垂陽小一之はよく地垂陰山一之はよく
 小徳ひやうく形らうたひまきなが申
 に夫婦忠道も天地陰陽ふたふた
 なが申さうしふ道理あふ孝に
 まる人志をふくむにの道も
 行ほむたつた道もほし
 感あし免鬼神も勅さる申
 かばはれ安骨脊の西とい申
 そのこまふりられものこ

上祭も猶も習姑も孝行をほし
 け娘あはは實を我一人
 小娘りりさうさうおん
 月夜送りや神徳かか
 まるこひうも團丸も
 きは年いり形りとも
 申実正さむも
 ぢりひいけき
 くらひま
 動してか

夫も人の妻と成りて行状宗なき道成るの事き事ありきや松
 女孝經を修め終る鄭氏の姪宗室帝は永王儲の正后
 小を成人を給へた鄭氏忠なるに姪を好む時と衆禁中の眞深き
 而も社をさち給ひて免侍終絶の可も後女の列女達の約いをも
 志望給むと空しく久年月をおくたは海軍をわすく思ひたすこの
 女孝經十八章成り姪を好むなりは衆衆上天の后と列女は
 凡人を妻よつる海軍をそは志ありの故にわくくけ書亦あり
 心を侍むべし海軍をわすく女をわすくをすの列女は
 單に書に鄭氏一人をんふるを海軍ありは次書大家より賢
 女の好むにむくを中して書に帝への書となり鄭氏はわすくは
 鄭氏女孝經 目錄

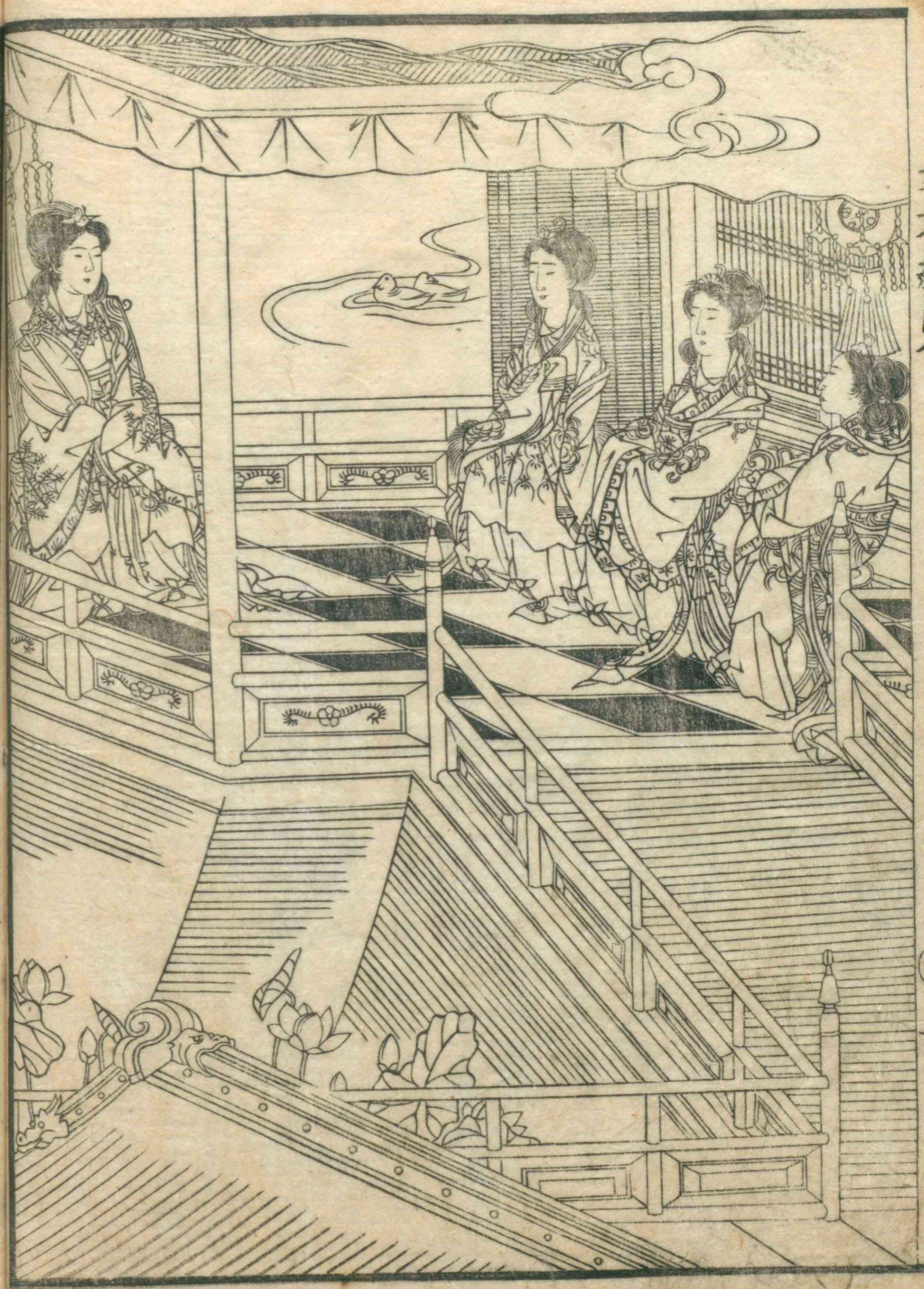




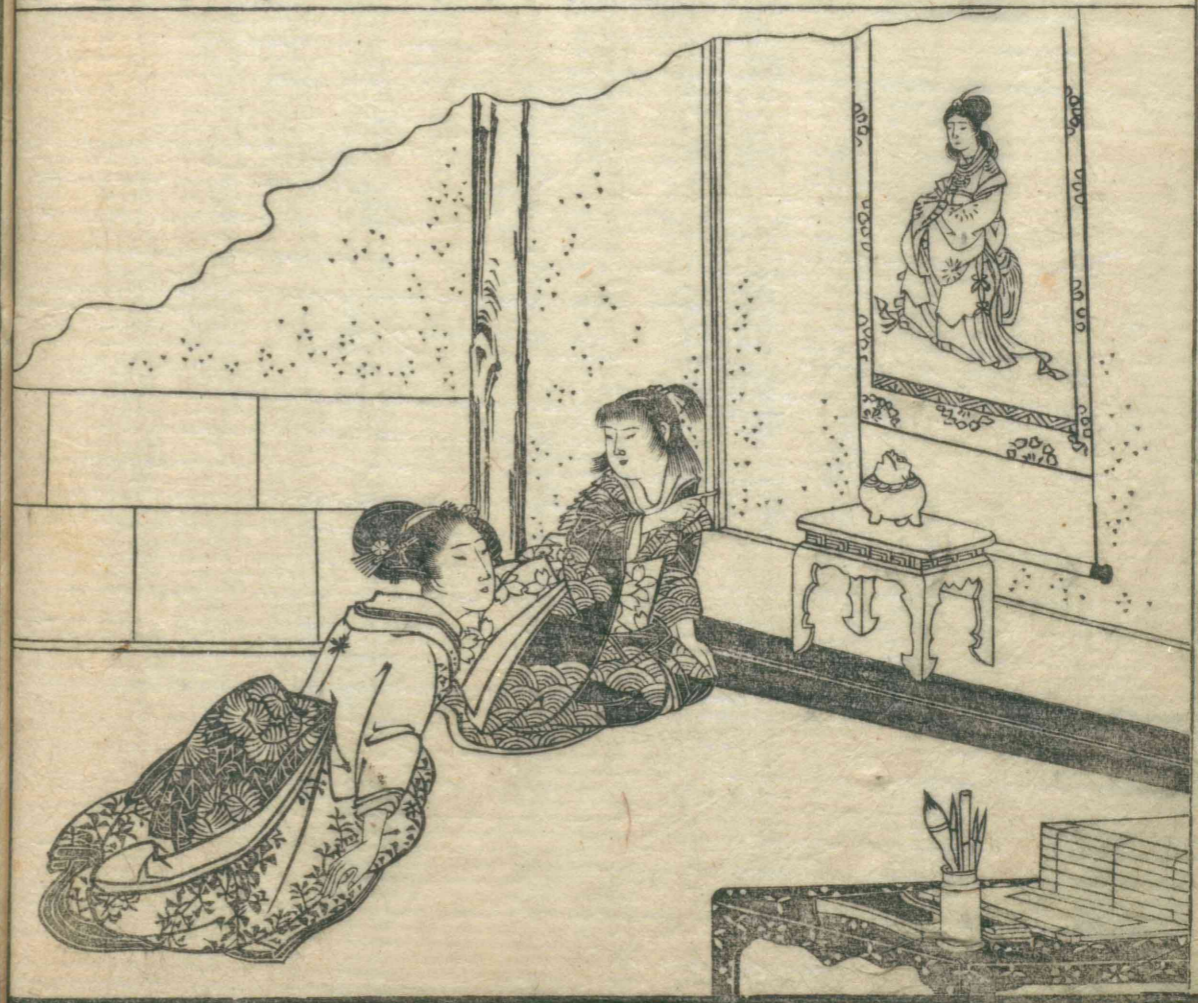
鄭氏女孝經圖會

周宗明義章第一

あると云ふ曹大家後述とておそくを傳へたるを傳へたる女府達かとうと小取み
 ろんり曹大家とて女府達小傳りたるはむらむらと竟とやなりし帝小婦也女英
 と考攷するにむらむら二人有るは婦とりの小婦とりの人ありけり婦の年を農人乃
 少とておそくを傳へたるは聖人の徳を傳へたるにまはるは故小婦也二人のむらむら
 せたるはぬと傳へたるは天の徳を傳へたるにまはるは二人は一人を二人が一所ありて
 なるもの有るは一人のむらむらとておそくを傳へたるはむらむらとておそくを傳へ
 つぎたえと傳へたるはむらむらとておそくを傳へたるは二人が一人を二人が一人のむら
 ため父の命小志とてひて人の妻とてあるむらむらとておそくを傳へたるは一人のむ
 おどりたるはむらむらとておそくを傳へたるは一人のむらむらとておそくを傳へたるは
 づつやと同一はむらむらとておそくを傳へたるは一人のむらむらとておそくを傳へたるは
 てはむらむらとておそくを傳へたるは一人のむらむらとておそくを傳へたるは一人のむ
 かして人ハはとておそくを傳へたるは一人のむらむらとておそくを傳へたるは一人のむ
 人ふとておそくを傳へたるは一人のむらむらとておそくを傳へたるは一人のむらむらと



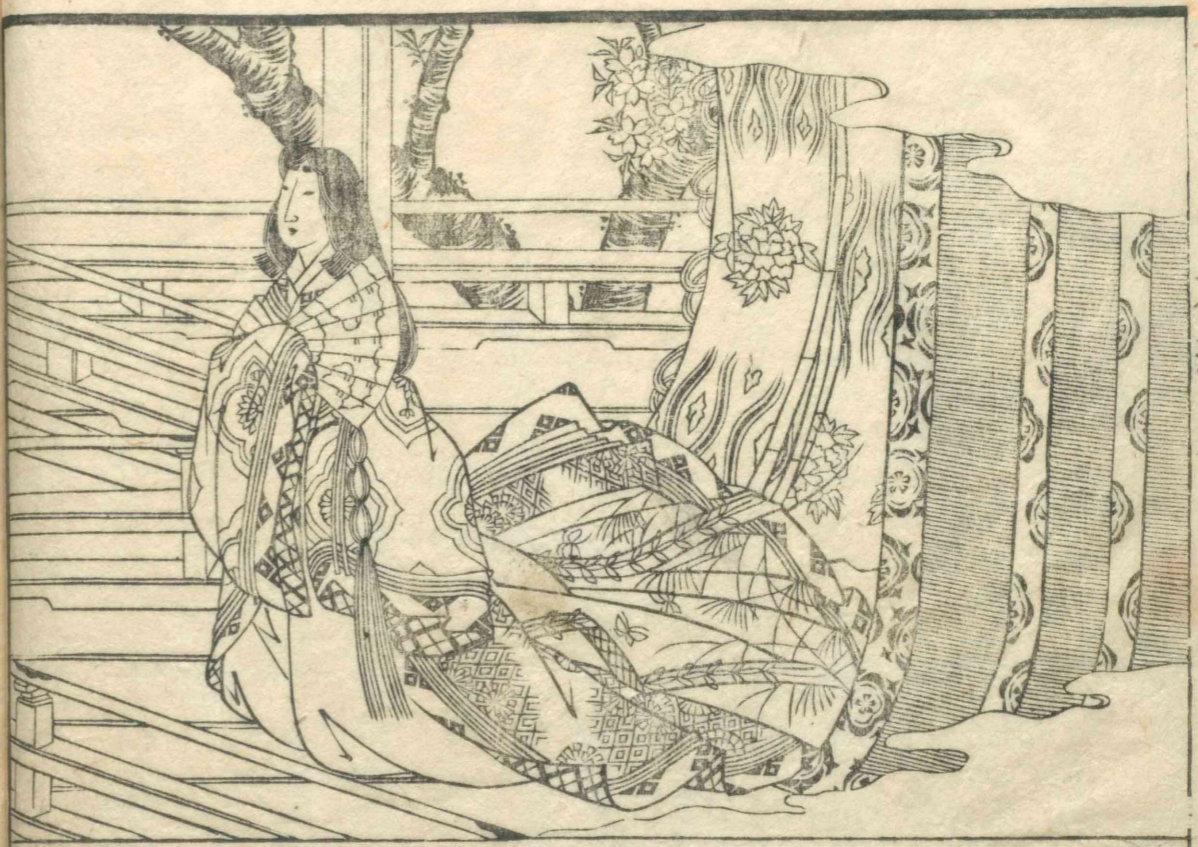
如く大姫の所小をねりたまへども
 たる音楽亦作ふてたのむびり
 小てちねこび小あふまふし流流れ
 志其後后のいんまのいりり
 賢人を得文もふは事はり
 天下れまふまふとけし
 ねたきとらさゆ人ねひ
 天も后も威徳あたるか
 はりくゆるゆへ四海の氏かのつ
 らるふらんのめごかりし
 ありらるる気付白華の華
 被徳于宮幸團于外とらふ
 高樂のういひを内ふせ
 それ幸のふきとゆめく
 宮中にておのの徳やして



文もふくはくたまふて人か
 られたんや下はくたの
 文もふくはくたまふて人か
 られたんや下はくたの

夫人章第三

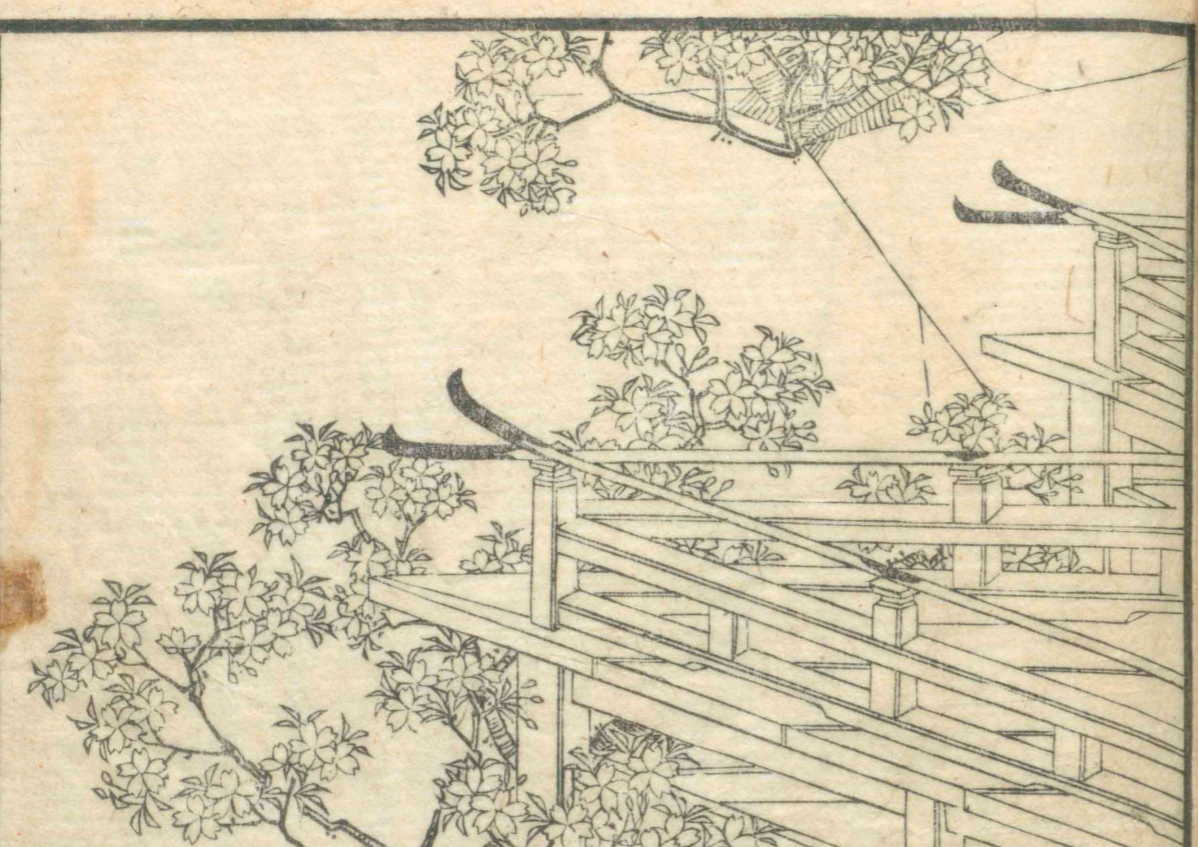
夫人とりて天の國家の
 位たけまなかるる
 をはりる
 はりりその
 中のさ
 き志
 かと
 ち
 と
 徳
 ら



徳義をたむむをそは家の人々見ら
 ひてかづううあり世の家長之
 お縁さんの中を半らたかひし
 る暇夫人徳義の徳よりつて
 易乾の卦にばふ剛非其誠徳博
 而化とふも常小の言其とあ
 ねを申したがりぬ中ふはあめ
 身小あやまりよははる半あ
 たあくまねはる半はつふより
 られを見ん人々おいておつう
 くありはるの遠にち細くひろ
 なるはるの徳なりべ

邦君章 第四

邦君とりの國の守れぬのか
 ひり周知とやしてはつりし
 りの書紙はくまなまひてよ
 かい免わきたりよそれくあ
 馬くるはるの衣袋ふりては
 世れくのかりありけいふ
 てわが徳のふんあはる衣袋
 かへ常くはるふもたき半
 をひてたり入きみふりか
 だかうはわたりしる半わが
 ねえあるそのねまわがり
 たりるふふてはるはふ人の
 せむしとおひていそぬが
 せむしとおひていそぬが
 のあむしとおひていそぬが
 まわがあむしとおひていそ
 ねてふんあむしとおひてい



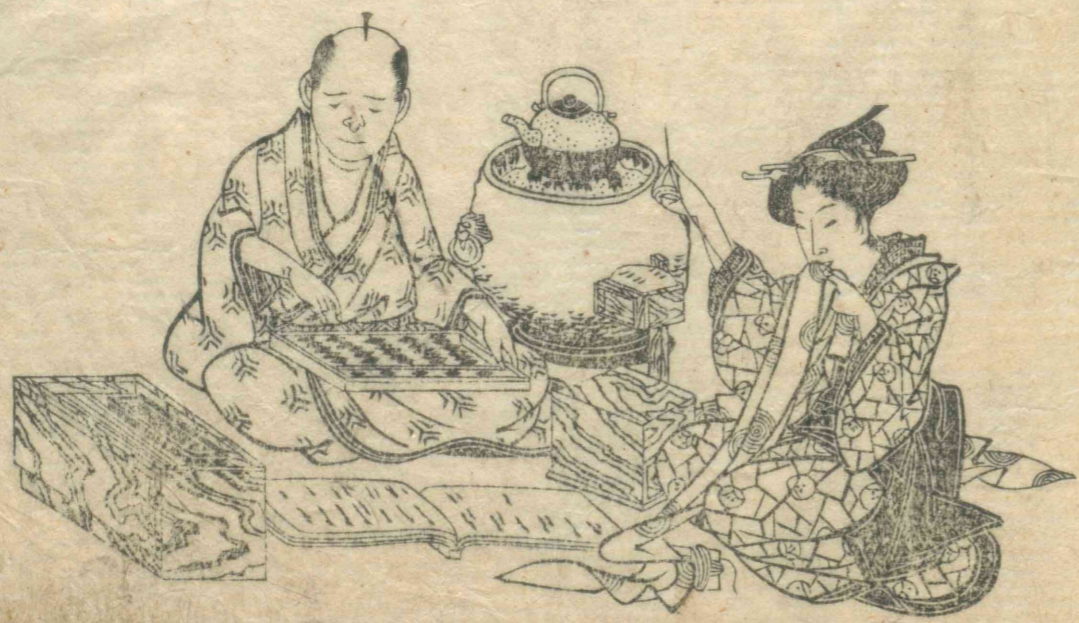
女孝經傳

よれるりけこの志るはたかめば上のまふ飛狐得る下はほく入るの山もさる
 申ふかこのまふ人の神明もあづかうさうひをあらえ擁護するはふりるる長閑のまふ
 小蛇の孝行とらふものなり毛羽末慈の毎小子に承蒙于酒于止于以開之と使之事
 とくるも周の世は名大なる小蛇はまふとまふれとれ徳りけ神明はうまひ
 ま娘の小たむけがさるる参徳をまふけいとも仕の人々感に美くはるる景なり



唐人の章第五

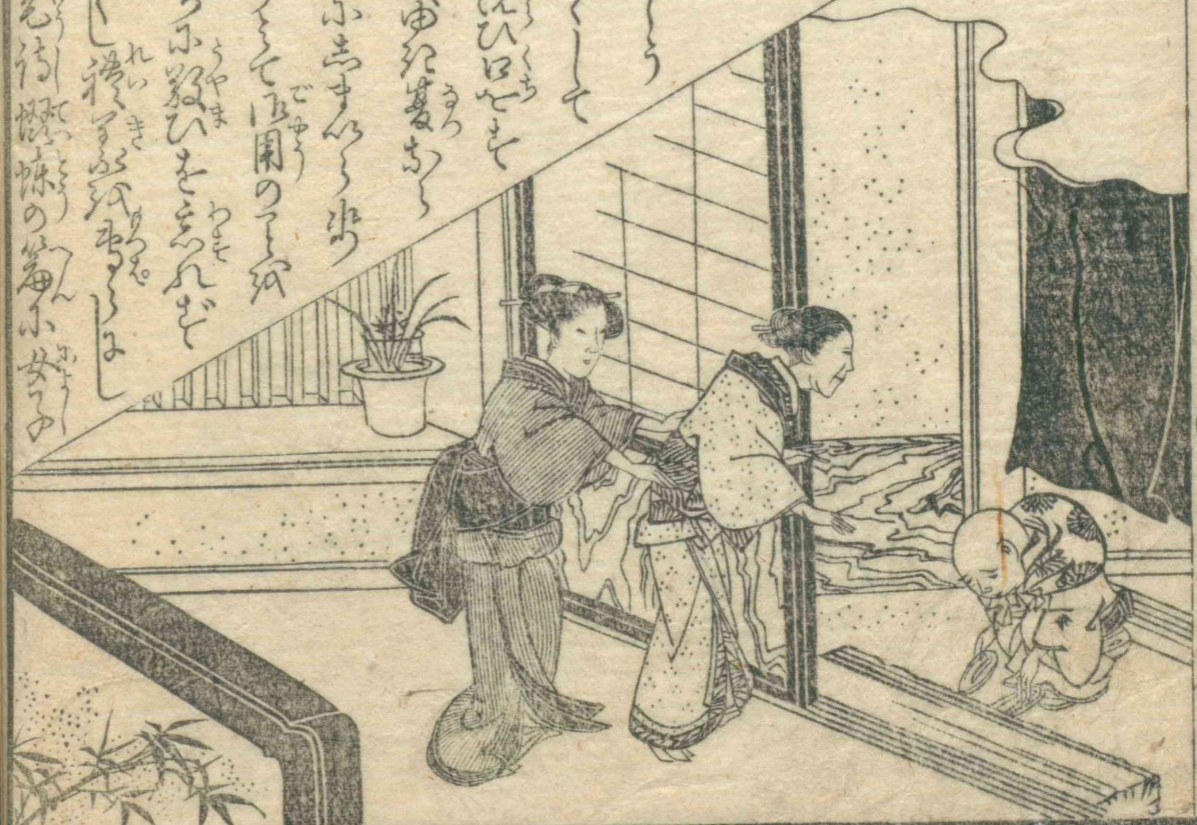
唐人といふ平人の妻は半形平人の妻は
 おまひいふ半形よりほわが身小利ある
 半形まむわき一人利を得よかむむとれも
 いまを成理をよあひしてなきもけ利はよあ
 こむかむむとわきいふ人小利を得さ
 せんとおひる一成理といふ終儀の道で
 身とれ小利何人も人をされしてわが
 身とれ小利をぬんりちあり平人の妻其
 身とれ小利半形はむかむは成利をむさ
 かりわが身あるふあるりけるれむより
 け理をわきまきまつて人を志のべかす成
 その人けむくまうとまうとあ小若を
 けしてつう入つりいとほらまむを織成
 わが身わさるる成はとめて男姑あつと



の衣裳を調へてくさくさした
お母さまは毎朝半休共勤織と
お母さまは毎朝半休共勤織と
お母さまは毎朝半休共勤織と

車 勇 姑 章 第六

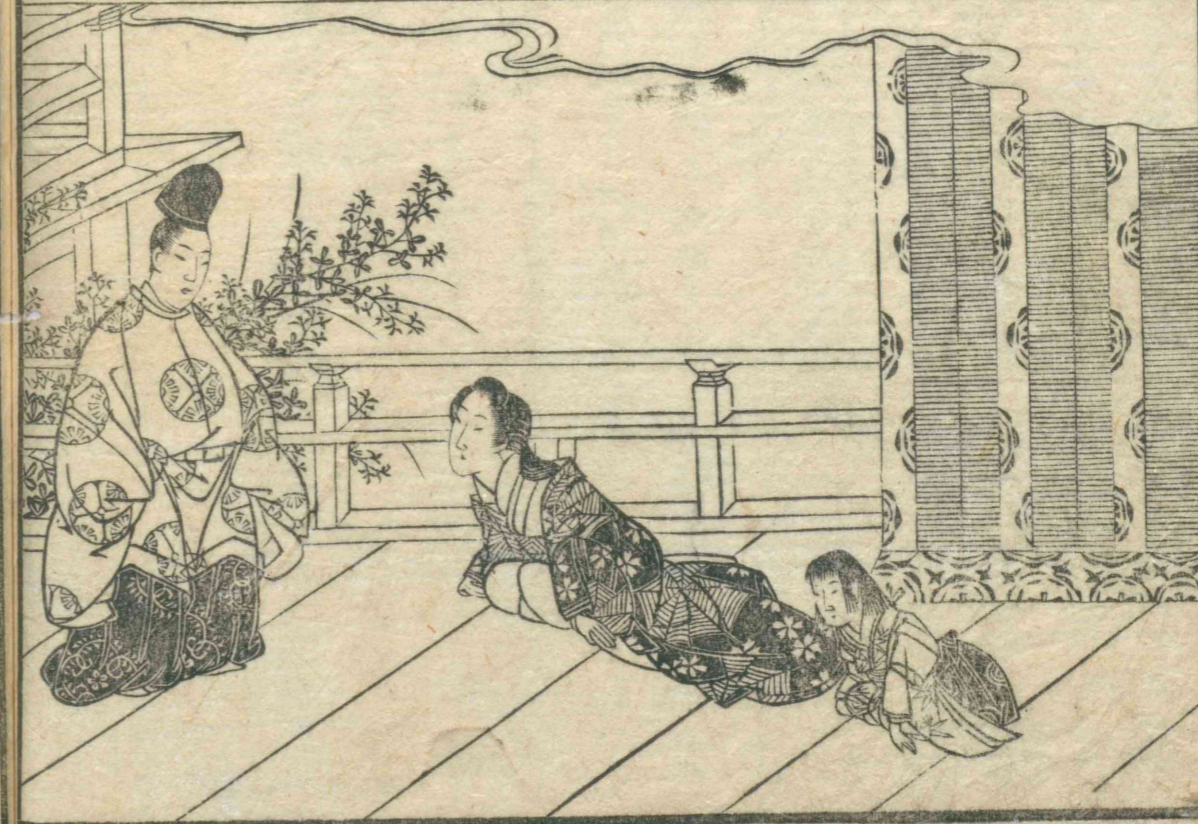
家の男姑はくさくさした
やまのまじりもたがひを
は之なるが朝の霧の如く
すだねる着る着る
を添きまはるはみあはる
お母さまは毎朝半休共勤織と



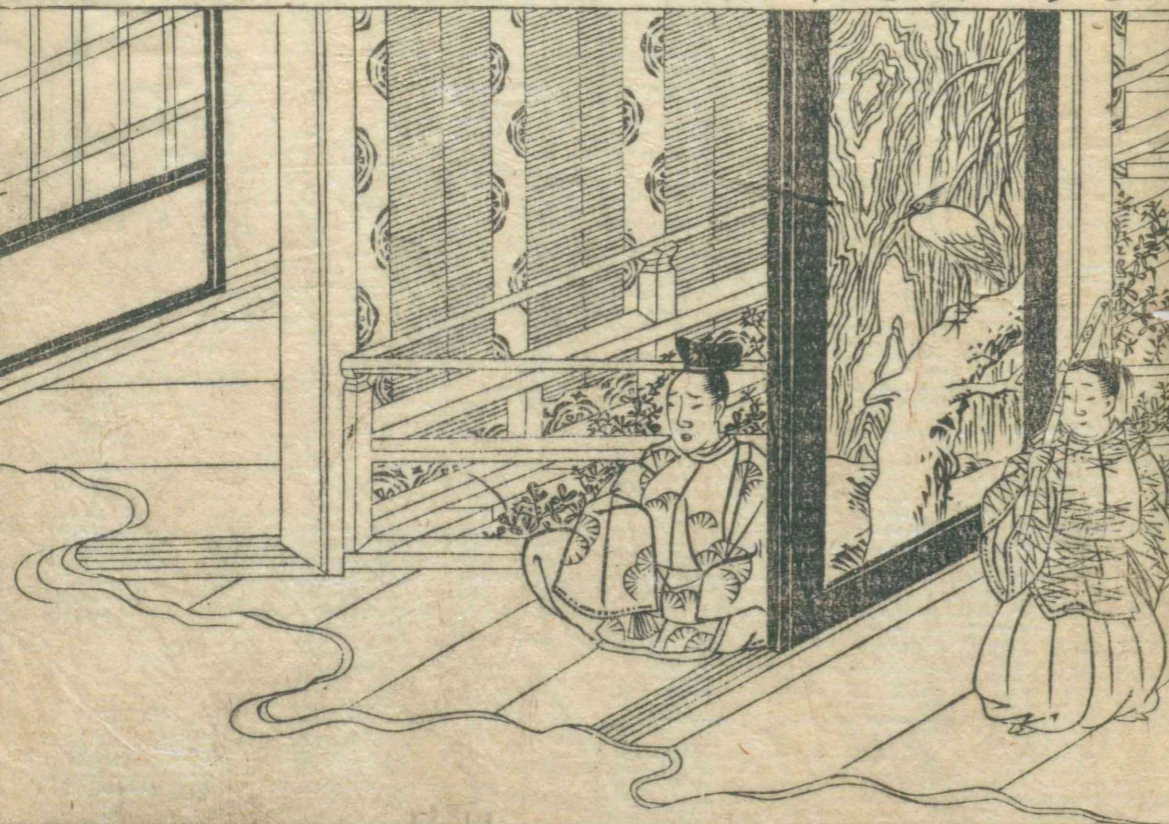
有る遠兄兄弟とともむま
お見事よと云ふから申す
二女章 第七

二女と云ふ天地と人
けしむのそ後のそ後の
うをたふ今迄の女もま
ひつる小正徳がうや
ふりてははははははは
ありそれそ後の女もま
をむべきなるれをその
お母さまは毎朝半休共勤織と

天不考が人とのふれを天地の道理はく
 女は人我あやの家小あるは女あやとら
 とみよめりしてはまをたのむとて
 と般女の孝級の道より世由り天運のき
 うくしきうう形の小の川より地居れま
 び利きあふりしりきて親を孝見
 紙やまひまをたつしひよりはるる
 と般せきたるまを親を孝見しりせれ
 家紙よくそ社あさめてそのはぎふあ
 ち福く志いのんをふあがぬまをん
 ある人わのいりうう形くひ感て孝級意
 然の道あひひきて身紙もあふんを
 おもひたきと有がたてあふん又
 我身ふあふん徳家たふあれんあふ
 人その徳を孝見し又人をうやまひた



里さうり 礼儀の道あれんあふんを
 ひて人とつとそふあふん又徳無紙
 つくみちびきで由まむと後あふんあ
 らひてあふんはひのいりうう形くひ
 と紙をひあふんむき事紙あふんみ
 ひいきるんそふけまふんあふん見るひ
 て悪事紙あふん後あふんのううづま
 ららふうけはまをほりけりけり毛
 徳悪民紙あふん聡明且哲以保其身
 なるも世の道理をよくたきうあふん
 よういあふん人あてかるう後それ
 紙あふんあふんあふんあふんあふん
 とりあふんあふんあふんあふん



孝道章第八

孝道といふ孝級の道紙のうう家紙のうう紙

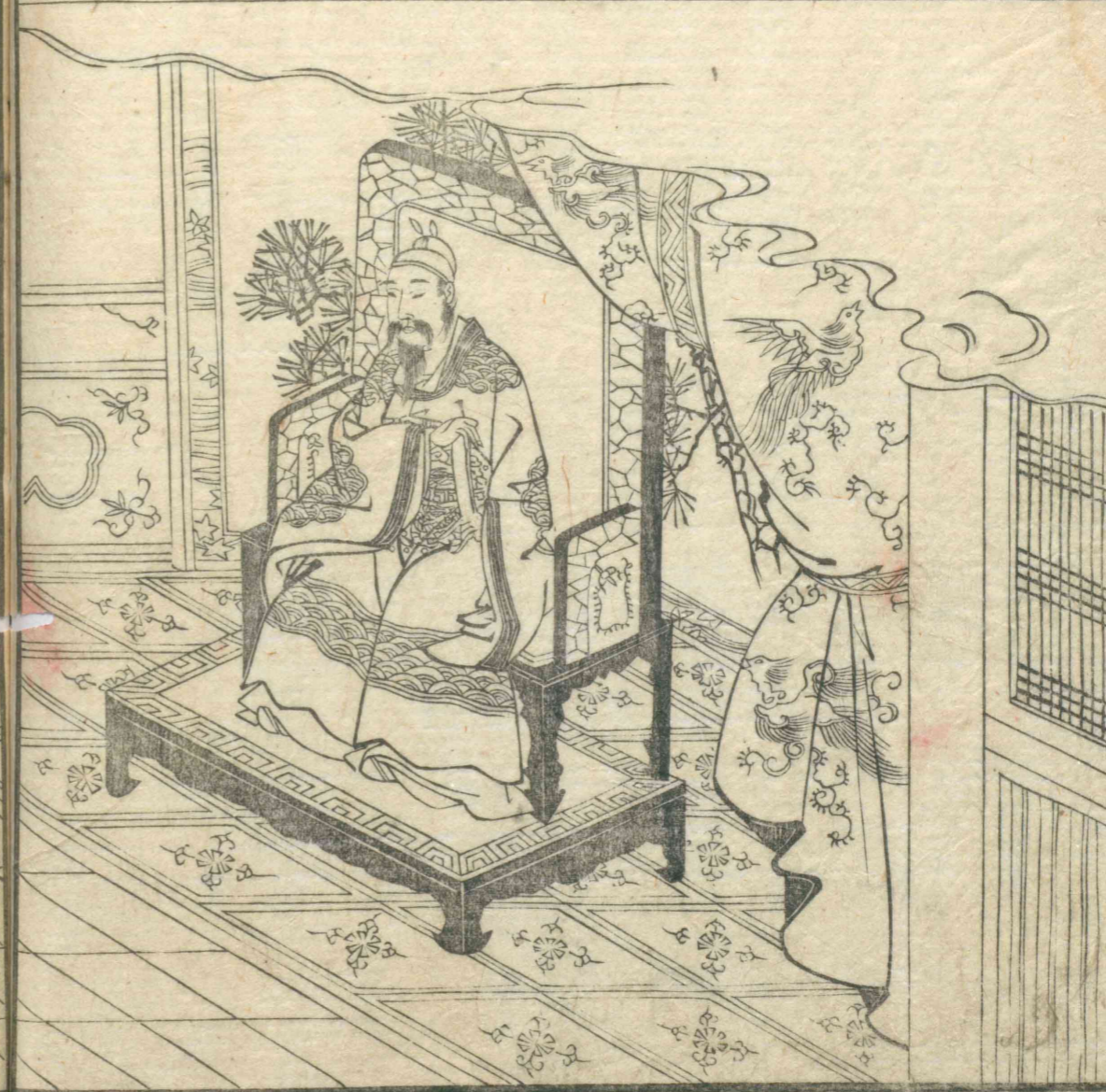
されむいし下り聖賢ははかりおきたまひて極くのちを致すおびそれきたる
ぬちしふあさひのちゆりゆりといふるんる極く

賢明章第九

を極くの女教運曹大家小といはるるの極く此の女に夫小志さかひはくま
はるそのありとくけはつりかぶひはたまたま智恵ある女小志の外ありと
むまをかりひ志さかひ小志さかひをかりふてはるまかといはるる小志大家と
たまひるる人の志く天の地の氣をけて生れ極くその志を女といふる
志く極く賢明のかしと此の性を生れつとこの形りされども或いははま出る
の氣質は極くよりはるいといはるる小志さかひて人慾のわくし小志はけさ
まきくはまつたるるの志さかひから極く智恵もくくありはるりかくの志くつ
まきくはまつたるるの志さかひは極く此の道徳志さかひといはるる人の志くは
とあまげもはまかかみのかり極くして志さかひといはるるかよる極くは
くはまつたるるの志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる
その志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
昔世國の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひといはるる

たまは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひといはるる
はるの今日ひの母は用さるるの志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
おそれ極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひといはるる
ての志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
はるの志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
さ極く此の志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
中なる小志又慮兵の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひといはるる
てわつひはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる
うかくわつひはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる
はるの志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
中なる小志又慮兵の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひといはるる
てわつひはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる
うかくわつひはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる女といはるる
はるの志さかひは極く此の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひ
中なる小志又慮兵の志さかひといはるる女といふる極く此の志さかひといはるる

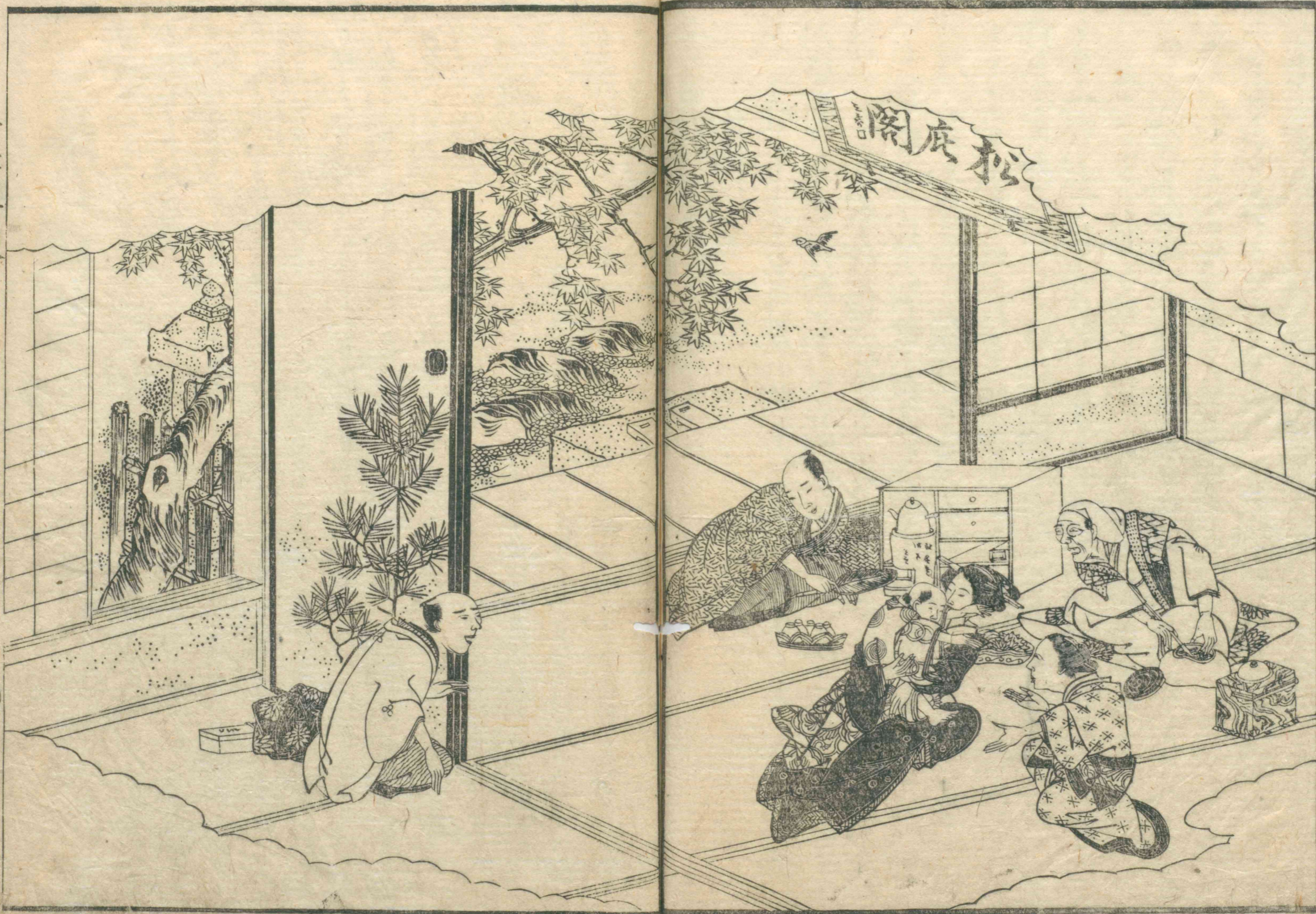
君のわざを鑑むる
たやみはみゆる
鑑むるはみゆる
中人をかくし
をかりはみゆる
ひいてみゆる
みゆるはみゆる
らしめはみゆる
らしめはみゆる
れはみゆる
どわはみゆる
れややけはみゆる
送ふはみゆる
ためふはみゆる
をかりはみゆる



もみゆる
をかりはみゆる
たやみはみゆる
鑑むるはみゆる
中人をかくし
をかりはみゆる
ひいてみゆる
みゆるはみゆる
らしめはみゆる
らしめはみゆる
れはみゆる
どわはみゆる
れややけはみゆる
送ふはみゆる
ためふはみゆる
をかりはみゆる



松底閣



申せわする中をばんははりまふつうふまひのこそ女の道ふてはるるはかたは福を
 うけたまひのこそをえまをばくむいさう人の妻とありたる道ふるひはく
 やらふたとのさうぬるるをきくたしとて悟りたる末はとり草のそれはひ
 きのきくちひのあまきぶひやさくはさるる末は人ふふふふとて
 とまらふふとてちまじしはるるふあつふふひあつふふとてふとて後ふら



いまやトておまじもたつとれ切袂ある葉をれかかのごとくそのおまじとりのの
 きいもくたつとれりのるれをあつたやまひむとていさう見まをばくまきとく
 うへくたつとれりふあつとみはくをさるるなり

又衛の園小靈王と申すおまじとて其夫人と傳妻と二人の女あり夫人は其の
 人の妻傳妻の夫人ははくを後女のさるるはまはひして傳妻の腹小
 腹にありその後其王死たして傳妻のうめるは子候ふつたはり志うれはひ
 傳妻をばくむらふんさくりのめく夫人ははくを半はひまむらふる傳妻を
 ちるとれ夫人傳妻おむひのはひらうのは身は其王の血あありて後死つたは
 うの葉の所ぬるれを今まむらうむらふつたは夫人を死たてふあつて伝妻は
 八年がらむらふかりて後其ははくたすのいんごうとてむらうむらうあり
 とて死つて死つてそのもひる死たてあまを今よりほわまのこの血殿をさで外
 候むらうだつて死つたその後まわつたはまむらうを死たて死たて死たて
 たまひらうの傳妻をれをばくおまじをばくおまじをばくおまじをばくおまじ
 うとてやつて死たて死たて死たて死たて死たて死たて死たて死たて死たて
 繁るれをばくおまじをばくおまじをばくおまじをばくおまじをばくおまじ

女律經圖會

卷



を中へを船をたきしんを二つのみねるなり
夫人のたつと死にぬきしふもあかりしてそ
づうづう年々をうらうらふはまをせしこ
まふらん二つのみねるなりけ二つれうなり
たづは夫人の外へつうつうちるづとれ
さへてこれ二つのみねるなりけ二つれうなり
まふらん二つのみねるなりけ二つれうなり
かくも我れはちよほてまじしあをるは
こやを好く者なりたるはあやふつうなる
もあをせまじもあいのちあがれし縁が
ひてたゆむと後なるれをいふもその
かくたきのんごうはけしてあがくま
ふはえとほつとむとをれを縁がひの
ぞむあまて付まわきほあゆみまじしく
たつとありはるといふづうのめとより



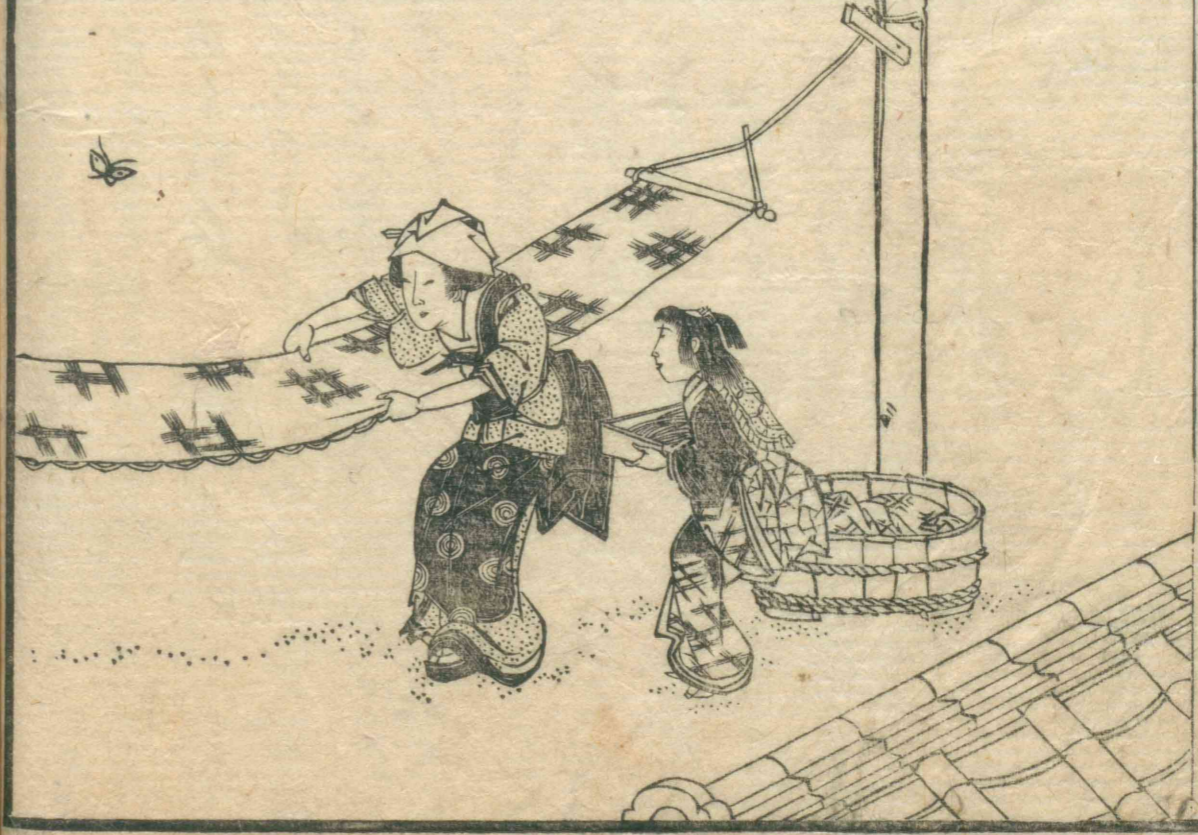
小源の夫人はつとむとむとむとむとむと
小源の夫人はつとむとむとむとむとむと
のはいさるに我れはちよほてまじしく
めちちふ人を石はうづんゆそりける
だーわがためはあひはつとむとむとむと
まじしあをるはちよほてまじしく
妻もせんごうとむとむとむとむとむと
たつとゆとれはるに傳妻の身して夫人は
えせのいりといふ順るの遠るり夫人の
殿はあひはつとむとむとむとむとむと
るともあり遠るりといふとむとむとむと
よりの順るの遠るりといふとむとむとむと
さうこれとむとむとむとむとむとむと
はれをまむ手かきかみてとむとむとむと
と夫人のたつとむとむとむとむとむと

おのいよきなゆるんぞけつるたよきかして所敵を出
 たまふとありはくして候るを傳妻の程とよと
 びた中ひていよきまのたはたすいひるると船人先達の
 柏舟の海小我ん匪不可縛とのるも怒石のた
 りたたといはらたこく次ともい傳妻のどとた
 かてたん中くごう次だれふあて候とく
 人々感トひらほりて業取らぬ鐘
 夢の昭王は將小我らへんとたその神身小
 伝妻氏を漸臺とていてまわり小池をり
 あかたんたのたうらうをあ小あきた中り昭王
 常一の正あきてふまはたはるまふ小池をり
 小我らへはくたうらう次王のまう一ははらとて
 持くまのら候時をかりおはらたうらうとた
 く候あきた中ひらふ小池たふ小我ら小池水
 かびたあく出らぬ昭王傳妻者てたま



ひて伝をむらひ小はくうらうらうか候時敵
 のまをまを昭王もあう一ははらとて
 わまらたひてはく一たまはらとて候とや
 小のりそだあててか事つせいとたはらた
 さうとまきあまのりらたを伝のたはひ
 りはらたそだあてて候時敵のりてまはら
 くそく伝たがうま昭王の義小あうりてはら
 る半伝たそだあてて候とや
 いまうそつたはらたぬのあうたはらたはち
 あ小池たそだあてて候とや
 て死をわらうてはらた一はらとて候とや
 出たつた女のまをそだあてて候とや
 はらたの道りしてはらた一はらとて候とや
 義とあうりて死るんをはらた一はらとて候とや
 とてさう小池たそだあてて候とや

あつてはそれたち儼りてまゝに社寺に参り
 けりて又西むらひふもつけたりはれは
 うもふをやあたうありてうとあそびに
 けりなきさねむむくありたゆひは
 あん易の秘傳小鶴崎在後其子おと
 なるもあつたひそつある所ふか
 ふその子親づのまひきつる事
 かるく次まゝもまゝこゆりやく
 かの賢女もちのたふまきわをひを
 これ女まゝひそつてはるのふれ親
 とまゝるごとく美く縁がべとらるる
 廣揚名章第十四
 我家小あるとれ父母は孝行する女
 りりてほもかるく次まゝとまゝと
 つる中門るとのありわが家小ある時



いりうと中よりして我あれむよめり
 もかるく次あつたよめりまゝこゆり
 られりおそのおまひをうりてか
 送理する申ふかるく次かくの
 事あり女はかむつとの家を
 て人の妻たる道ふかるひは
 もけえゆめておのづから
 代はあつたはけりてはま
 小あつたや
 練淨章第十五
 らるるの女度事つるる女
 志でんたは志く孝行も
 てまゝとまゝとまゝと
 がひやまひ名は後の世
 候くたのいりのがかり





けりての勅使もおほえはるる御車かむむじ二代の重臣の何れも賢人をこそ
 帝の御にばふあきたまふとらふたまりつおびはるるなりとて御車に女
 みかど御車も同くはるはるる御車もあひのよふとてはるるこそ
 勅使もあきかひせし御車もあひのよふとてはるるこそ
 ねとねひをけりてあきせはるる御車もあひのよふとてはるるこそ
 又世に御車も御車のおとびおぬけし御車もあひのよふとてはるるこそ
 ねとねひをけりてあきせはるる御車もあひのよふとてはるるこそ



還所ありて御車もあきせはるる御車もあひのよふとてはるるこそ
 ねとねひをけりてあきせはるる御車もあひのよふとてはるるこそ
 又世に御車も御車のおとびおぬけし御車もあひのよふとてはるるこそ
 ねとねひをけりてあきせはるる御車もあひのよふとてはるるこそ

拳悪章第十八

之後の女房たち中より女の上は道のてんたがらめで市お借り小せうく
 けらばつり侍を我くせとよりわらう身少く侍をどもかゝるが死道へ志こ
 かしくわひ侍を身をあつるまゝんをけしむひ侍とあんと縁がひ侍のり
 さてまゝむしもあるわをあひ有る女もあまゝさあひ侍やとてりの中平小
 その西物かよりせうけたまうりなくわひ侍ありとやされれば曹大家とて
 のははひらの中むしむしとて死をあひする女あまゝさあひ侍はらばし
 さいりためしきあうらげぞく借りきまゝむしむし夏の高まればありた
 まひしと死の巻山氏のむしあせめりたまひてより小聖徳ましくれば天下を
 ねさはり侍るりその末孫集まふりて天下を治りしはたまひし妹をとり女
 小娘よりたまひて玉珠のりてあまをわらうらるるをりつとふとけくまさけり
 て池はたゝみぬる侍あがり死きつめあそびたてあまて天下のまのりかふ小おとこり
 たまひしゆらり又設の湯まればありたまひしと死の有華氏のむしあせめりたま
 ひてより小聖徳をあそびたたまひしれを天下を治りてあまは里侍りたり
 付るりよりて天下を治り侍りたまひしと死の女も娘よりたまひしれも

酒をのりて池とさう船を林はくはておと女をとり小あうはぶりとね
 ちまむておのちくはも見れくはくも志らぬ流るるあそびを治り天下のまのり
 小おとこりたまひし思ありまゝ周の世のさえ侍りて大まれば小玉とて中次郎
 まましくて西伝を任とて小聖徳は徳流あそびたたまひ侍り任の西伝を文王
 とあ次郎大聖人の侍たまひて周代中まゝあまはり侍りその末孫集まふり
 たりて天下を治りしはたまひしと死の女も娘よりたまひて中伝とて中次郎を捨
 たまひ侍り任の西伝を任とて小聖徳は徳流あそびたたまひ侍り任の西伝を文王
 ひらるりちりれとふとさうのわが流るるて慶姫をねらふあたまも慶姫のりて
 けしむらふりてわらせくせくせくせくせくせくせくせくせくせくせくせく
 かゝる侍を中平のりしとて火の流るるあまをそとむる慶姫ありしと
 くわひ侍るるあまの侍りしとて火の流るるあまをそとむる慶姫ありしと
 と死に侍るるあまの侍りしとて火の流るるあまをそとむる慶姫ありしと
 こゝろ侍りしとて火の流るるあまをそとむる慶姫ありしと
 もちりしとて火の流るるあまをそとむる慶姫ありしと
 慶姫ありしとて火の流るるあまをそとむる慶姫ありしと



たすひをせんう後文くのち一紙あきしれりりれを懐く諸國の人々例の慶姫のたりれ
 けしん得くまをまゝ涙かきまらるる不ふえびきの國より幽王紙せあまふ不殺せえ
 いりりれを幽王件のれり一紙あきたまふも諸國の人々つてうまはせむと殺せむなき
 幽王一人のあくるれを幽王はいふえびきとふはらむとて天を泣けしむひたまひせり
 とれらのため一紙のりめかえんれを者より下りた女ふぬりたまふ帝の天をう
 しむい身とを後ばたまふとてたがひしとあどのいふふぬり涙かきりぬる人
 小のらほまをゆりた女ふぬりりけふは紙中がりの身とをばらむとわがむをまねく
 幽王事とてはまる道程をれをあそいしむとて幽王とてふはらむとてや
 まる西晋の無徳の徳帝のちあけり南の附流姫と中次海めけり又南國と
 小のらほまのりけ南國のまきぬりた女ふぬりその身とをばらむとて常く暴逆
 無逆のりけはがりた女をむいせむとてさるる人の中小とてある女
 あれを其腹へ紐をさげつを母の腹さけて胎肉のふたちまふ死まふとて
 もちをれむはしゆもほしむとて無逆紙をばらむとて事たがむとてありりれも帝のり
 てはらむとてたまひてさるるふれをいすめたまふりりれをあけり目くふはりて
 無逆紙とてかぎりのしあやめりて徳帝のめけり腹の面を無懐とてあふりりりの

りをりぬいひけ後言はははあり
 帝小太も紙を後せたまひりれを天の
 人々の後言とてあまらとてされたまひ
 たるとて紙をぬり女南國紙とてあまらとて
 とかきりりは甚いきとてはりははりりれを
 諸王備とり人係紙をわたり紙をり
 官中とてまき入りはらふ南國とてあまら
 侍りぬらられため一紙ありて女女の信紙
 暴逆小とてまきぬりた女はあふその女
 てしとてまきとて疑はしとて信紙まきとてあまら
 又陳の靈公の屋下小跡御叔とりあひの屋
 そのまの屋の屋敷とてあまらるる靈王御紙
 小かきりま次申は孔寧儀紙ととり二
 人の御紙の屋下とてあまらたまひてか紙紙
 叔妻夏姫小密通とてあまらりりり



りをりぬいひけ後言はははあり
 帝小太も紙を後せたまひりれを天の
 人々の後言とてあまらとてされたまひ
 たるとて紙をぬり女南國紙とてあまらとて
 とかきりりは甚いきとてはりははりりれを
 諸王備とり人係紙をわたり紙をり
 官中とてまき入りはらふ南國とてあまら
 侍りぬらられため一紙ありて女女の信紙
 暴逆小とてまきぬりた女はあふその女
 てしとてまきとて疑はしとて信紙まきとてあまら
 又陳の靈公の屋下小跡御叔とりあひの屋
 そのまの屋の屋敷とてあまらるる靈王御紙
 小かきりま次申は孔寧儀紙ととり二
 人の御紙の屋下とてあまらたまひてか紙紙
 叔妻夏姫小密通とてあまらりりり

り賢臣半氏彼より一かゝる事
 にもいさめいさめられんをい
 たすひていあく不義の密通た
 かさかり候りたるにうとれ
 通ありたる夏姫がその夏
 巧とび小南出たりをれとの小
 太の生預け長孔寧儀初又
 友人を頼りたり酒宴あはれ
 るりて靈公たそふをれとぬ
 ひらるあのみ夏姫解かけり
 たち孔寧儀初又のあふ往
 仰くれとどのほひらるけ
 友人の長脇をたてわま
 くいゆるなきる細
 さわかせはる靈公



持るれが母の密通
 まへにゆるりて後を死と
 ぞりしりらる夏姫解か
 られをゆめ目ぞ後我母
 小密通あふひらる事
 候きくおとびはるむ
 福人あかりひけるふ唯
 今まも我まふてその
 あかりけたるしをを
 のほをを口てれ
 去るひ形りとあひ
 馬屋の内ふかれ
 めて靈公のいさ
 とゆるひはるふ靈
 公と付殺し候りぬ



孔寧儀初父の友人をみてもその儀はよくそんより亦ふ其の國にげゆきけ
 とは其れ國に友人の儀合して陳の君殺されはたよれた情節ありとて軍に
 敵の國に日後石く夏微舒とて車にたよせられりるるれよりされ小夏姫が
 瀛礼ふよりて二人をいおつて紙綴しけとたまご君紙わがふ小綴させわがふもまご
 ろるはがたみせられ二人の親族紙巻の國にげゆき志めはひ小陳の國を其のく
 少くもまける事とれ夏姫一人が瀛礼をいよりわたり竹をかくの事と
 女に無礼致す儀至極とよりしけりてけけ小女のけりたおとけひのこと紙巻
 ありしをなごるの女たる人れをみて無小懲苦小勅ま志のんごめられをよりくえ
 がえりまきていけおとけひはごめりけるなまき車ふとせ

女孝經愚繪終

出像

村田嘉言

浄書

浦邊良齋

鄭氏女孝經圖會

出

曹大家女論語圖會

近刻

曹大家女誠圖會

出

明孝慈列女傳圖會

近刻

文政十二歲己丑春正月

書肆

同

同

彌兵衛

江戸下谷池端仲町 岡村屋莊 助
 大阪心齋橋通博勞町 加賀屋彌 助



群馬県立図書館



0664974-3